

倭国の初めと終り

福島 巖

倭国は朝鮮半島南部金海に首露王が伽耶（加羅）国を作ったのが始まりである。この資料ではその首露王が天照大神であることを明らかにした。天の岩屋事件も金海であったことで中心人物は男神である。出雲の国譲り（AD160年頃）の後、天孫降臨があって筑紫の糸島と大和に分国が作られるが倭国の中心は半島の金官（宗家）であり、高霊の大伽耶であった。

古代日本は大型前方後円墳が次々にできる頃、高度成長期を迎えていて半島の倭人が移民になって日本に渡り倭国（伽耶、任那）が存亡の危機を迎えていた。この後、金官伽耶最後の王、仇衡が大和朝廷に欽明天皇として乗り込んできた。この時から日本が正式の倭国になった。この半島にあった倭国の最初と最後の部分を取り上げて報告する。

倭国の始まり

秦や前漢の頃から中国の中では戦乱が絶えず人々は不安な生活を余儀なくされていた。魏志倭人伝が伝えているように土地を持たない倭人は平穩を求めて北上し遂に渤海湾を渡って朝鮮半島に移動してきた。住む場所を探して南下し半島南部の小さい島に住み着くようになっていった。紀元が変わる頃の話と見られる。三々五々楽浪郡や帯方郡に援助をお願いしている姿が倭人伝の記述に出ている。これらの人々と国造を始めたのが首露王をリーダーとする5人の将軍たちであった。首露王はAD42年、朝鮮半島最南端の大河「洛東江」が海に出る金海の地（現在は釜山空港のある場所）にやってきた。貿易には最適な良港を有した平坦地に金官伽耶国を作った。伽耶はインドのブッタカヤ（仏教聖地を意味する）由来の名前だとされる。

三国遺事の「駕洛国伝」に伝わる内容によると金海は100戸程の住人が住む漁業と農業を営む村で9人の酋長が管理していた。首露王は有力者5人を引き連れてやってきたが話し合いによって住み着くことができた。大河が流れていることと、川を遡上した奥地は発展性があることを見越してここを選び王宮を構えた。5人はその後各地に分散して国を作っていた。

王后はインドから

王宮ができた時酋長の代表は早く嫁さんを探すように王に申し入れたが、首露王は既に神のお告げで私の所に向かっていると話していた。AD48年にはインドのアユタ国王の娘16歳の王女許黄玉（ホファンオク）が首露王の王妃になるため、陸と船を使ってやってきた。花嫁の集団は、お茶の種やおびたしい財宝を持参した上でやってきた。王女は娑婆石を携えてきて、虎溪寺（現存しない）に初めて仏塔（ストーバ）を建てた。これは現在でも王后陵に保存されていて仏教がやってきた一つの証拠品になっている。なぜ王妃がインドからやってきたか・・・アジア各地に存在した倭人たちのシンジケートを通して話ができていたものと推定している。倭人は中国を初めシルクロードの各地、チベットから

インドの地まで少数民族として住み込んでいた。アユタヤ国は後に、タイにも進出しているが、ここも大仏教国で、寺院や大きな寝釈迦の姿が今でも残っている。

女王の兄は修験者

また一緒について来た兄のアユタヤの王子、宝玉仙人は王につかえるのではなく洛東江を遡った伽耶山に修行の場所を見つけていた。富貴を浮雲のように見、塵界を超越して修行三昧に行動して「長遊和尚」と呼ばれていた。首露王には十男二女の子供がいたと伝えられているが、宝玉はその中の七人の王子を呼んで伽耶山中にて修験者の生活を一緒に送った。その七人はこの地で成仏し、首露王がここに七仏寺を建立したという。また娘の妙見王女もこの地で修行に励んで「妙見信仰」の祖になった可能性が強い。海印寺ができたのはずっと後の時代であるが、この辺一帯には多くの寺院が建てられていたことが「三国遺事」の「駕洛国記」に載っている。

神道の初め

山伏や修験道は神仏習合の代名詞のように説明されているが宝玉仙人の修業には仏教的要素が入った、経を唱える現在に伝わる山岳修行であったことが想像される。伽耶の仏教伝来が朝鮮初来として認められていない理由の一つは仏像を伴っていないことが考えられる。紀元1世紀の段階ではストーバ（仏塔）が一般的で偶像崇拜の釈迦仏像が出てくるのはその次の時代である。伽耶の初期の遺跡からは念珠や玉の首飾りなど仏教装身具が多数発見されている。仏教を象徴する卍型銅器も多く出土している。

高霊と後の大伽耶

高霊は大邱から1時間ほどの距離にある。洛東江から分かれた大加川、安林川沿いの盆地である。両河川はすぐ下流で合流し、昌寧付近で洛東江に注ぐ。また上流に行けば峠をこえて、蟾津江を通じて海に出られる。さらに峠道で安羅伽耶、百濟方面にもつながる。洛東江が事実上使えないときに、川をさかのぼって蟾津江を下って海に出られる立地は、大伽耶の発展に大きく寄与している。また、近くには海印寺があるが、これも大伽耶の故地だったことと深い関係があったと思われる。高霊は四方にでることのできる交通の要所であった。

スサノオとの関係

伝説によれば42年頃に始祖王（伊珍阿鼓）が出て半路国を建てたのが大伽耶の前身とされる。神々の系図を紐解くとその始祖王に該当するのは素戔嗚（スサノオ）しか考えられず金官伽耶のアマテラス神（首露王）とスサノオ（伊珍阿鼓）が兄弟であった可能性が最も高い。大伽耶はその後滅亡までに16代の王を数える。最後の王については記述があるが中間は全く記録が残っていないので他の情報を補って全貌を読み解いてみたい。

スサノオは高霊で国作りを始めたが何もない荒地が広がるだけの場所でやっていけないと判断した。国を脱出して新羅の海岸に近いソシモリに着いたが、ここも安住の地ではないと息子のイタケルを連れて船を作って出雲のヒノ川の上流にたどり着いた。古くから住

んでいた住民と戦いをしながら国土を開発した。産出した砂鉄を利用して鉄の製造にも着手し6代後のオオナムチ（オオクニヌシ）の時代には大王国を作り上げた。（AD150年頃）

葦原の国譲り

金官伽耶の人々は九州筑紫地方に積極的に進出して各地に村（小国）を作り移住していった。反対に洛東江沿いに農耕地を開発していった人々も土地が痩せていて天候の問題もあり食べていけない住民が国土に充満していた。「三国史記」には飢えた倭人が大挙して新羅の国境を侵した話が載っている。国全体を見通したアマテラス神（第6代目）はオオナムチに問題を提起した。金官に近い海辺に住んでいる人々には海の向こう、列島の情報が頻繁に入り近畿地方が住み易く豊かである事が分かっていた、そこに行くには出雲を経由して但馬から瀬戸内に入る必要があった。玄関口の出雲の国（葦原中国）は天津族（金官）に譲ってほしい、列島（日本）は我々が管理・運営するが、交換条件として半島にある伽耶諸国は君たち国津神が管理して欲しいと持ちかけた。長時間かかりトラブルはたくさんあったがついに合意にこぎつけた。出雲の国は天津（天照）系が管理する所となった。同時にアマテラス神は孫のニニギに「葦原中国はお前に任すから皆を引き連れて行って管理しなさい」と天孫降臨の指示が行われた。しかしすぐには実現せず4代目の神武の時になってできたのが神武王朝につながる伊都国の誕生であった。

首露王とは誰か

「三国遺事（いじ）」の駕洛（から）国記を読んでいて初代首露（シュロ）王の即位AD42年から199年まで王位にあり157年間生きたと記録されていてとても信用できる記録ではないとみていた。駕洛国自体が途中で消滅してしまったので正確な記録が残るはずが無いと諦めていた。ところが逆にこの数字に込められた何かのメッセージがあるのではないかと考え種々検討した結果、首露王そのものが「天照大御神」であることがほぼ証明できた。

平均的な王の在位期間

古代朝鮮の新羅・高句麗・百済の王の在位期間を調査した結果、親子のスムーズな世代交代の場合は平均で25年毎、事故などで数年の短期継承を除く平均的な王位の継承は22～23年と見て間違いないようである。首露王の在位157年間は7世代に渡る長さであり、どのような理由でこんな表現をしているのか検討する必要があった。

首露王の結婚と皇子

王は中国から大勢の集団を引き連れてAD42年に金海に降臨している。説話ではここで卵から生まれたとして誕生日＝即位日という無茶な設定がなされている。強力なリーダーであるからには年齢も40歳位にはなって王としての経験も10年は既にあったものと考え。

「駕洛国記」によると48年16歳の許黄玉と結婚し49年太子の居登公が生まれたという。皇后は189年、157歳で亡くなり首露王は10年経った199年に158歳で崩御し宮殿の東北に高さ1丈、周囲300歩の首陵墓を作って葬られている。

天照神が日本書紀や古事記に登場する場面

たくさんの記事が掲載されているが要約すると次の3点である。

1) イザナギ大御神が禊(みそぎ)をして左の目を洗った時天照神が、右目を洗った時月読命(みこと)、鼻を洗った時スサノオ命が生まれた。天照大御神には「高天原」を、月読命には「夜の食国」を、スサノオ命には「海原」を治めよと命じられた。

2) 天照大神とスサノオ命の対立・葛藤

天照神が生んだ5柱の男とスサノオ命の3柱の女の子の子どもについて名前や役割を記す。スサノオの狼藉事件や天照が隠れた天の岩戸事件などもっぱら天照ースサノオ関連の記事が中心である。

3) 葦原(あしわら)中国の国譲り

この国(出雲)は自分の息子忍穗耳(居登)が治めるべき国だと天照神が主張してオオクニヌシと

金官伽耶王の即位年			
世代	即位年	三国遺事	推定
1	40	首露 42	首露 42
2	60		天忍穗耳
3	80		天 穗日
4	100		天津彦根
5	120		活津彦根
6	140		熊野クスヒ
7	160		A忍穗耳
8	180		B
9	200	居登 199	C
10	220		D
11	240		E
12	260	麻品 259	麻品 259
13	280		F
14	300	今勿 292	今勿 292
15	320		G
16	340	伊品 346	伊品 346
17	360		H
18	380		J
19	400	坐知 407	坐知 407
20	420	吹希 421	吹知 421
21	440		K
22	460	至知 451	至知 451
23	480		L
24	500	鉗知 492	鉗知 492
25	520	仇衡 521	仇衡 521

談合を重ねた。交渉が進展せず高天原の「安河(洛東江)の河原」に幹部を集めて出雲の交渉に誰を派遣するかを何度も話し合った。10年近い会談の後、交渉が成立し葦原中国は天照系の国になった。

天照神が長生きしなくてはならない理由

記紀に登場する天照神の交渉相手がスサノオとオオクニヌシであった。私は単純解釈してオオクニヌシの相手は天照5世孫と決め込んでいたが公式の見解はそうでなく同一の「天照神」そのものが解決したことになる。そのためには更に5世代分長生きしないと矛盾してしまうためこのような創作が行われた。これらの事実から

天照大神=初代首露王 であることは明らかで天照は女性でない事も証明できた。

高天原は天の上にあるのではなく大河が流れる金官王室のある金海にあり、天と地の行き来は金海と出雲の船の往来にあった。

金官伽耶(駕洛)王の即位年

金官伽耶の系図の解析を試みる。朝鮮

三国の王位在位期間を算定してみると凡そ20年と見られる。40歳で即位して60歳で退位するパターンであるが食糧事情など全く異なる古代であっても庶民と王室とは異なっていて当然であろう。

三国遺事は「駕洛国王室」として記録されている内容を示して王の右にある数字が即位年である。である。首露王は42年に即位して息子の居登王に譲るまで157年間在位していたとして残されている。居登王も60年間の在位であるがそのようなことはありえないので著者が推定して

考えたのが右の「推定」欄である。A・・・Lは記録されていないが王または王に相当する人が存在していると見做している人物。

天照神の息子忍穂耳は首露王の息子居登皇子と同一人物と考えている。70年代の即位であるが国譲りと天孫降臨の時オシホミミとして再度登場している。これをA天皇として扱っている。天照神の子どもとして生まれている5人の神、天忍穂耳・天穂日・天津彦根・活津彦根・熊野久須毘は首露王という名前で取り扱われた時間帯を実際に通過した5世代の王であろうと考えている。

最後の仇衡王は521年即位して532年に国を亡くして退位している。約500年間の間に10人の王がいたことになっているが25人以上の王がいて当然と思われる。天穂日の系列から出雲臣・武蔵国造などが生まれ、天津彦根からは茨城国造・額田部連らが生じている。

天照大神が首露王であることが明確になって

伽耶国初代国王首露が「天照大神」であることがはっきりしたことで日本神話や語り継がれてきた歴史の常識が大きく変わってくる。

- ① 天照神は男性で、金海に降臨した倭人の代表者で伽耶国の開祖。
- ② 高天原は釜山国際飛行場のある金海の王宮であり幹部が集合して会談を重ねたのは洛東江（らくとうこう）の岸边であった。（金海市西上洞）

葦原中国はスサノオが作った出雲国のことで船で往復したことが天に上ったり地上に下りた言葉で表現している。

スサノオが船で出雲に向かったのは金海の港からは天照に追放されたため使えなかった事情による。スサノオもツヌガアラシトも新羅の人間みたいな誤解を与えている。

- ③ 首露王の寿命が158歳だったことは伽耶の建国と葦原中国の領有・天孫降臨を王の責任で見届けたとする意味合いがあった。

そのためにはこれだけの寿命延長が必要だった。実際には6代、7代目の孫の時代になっていた。

- ④ 観光地で有名な金首露王陵と王妃陵は大成洞古墳群の西側にある。首露王と許黄玉の円墳である。これが天照神とその王妃の墳墓である。
- ⑤ 金官伽耶国は532年の新羅に統合されるまで490年間継続した国家であったがこの間10代の王が在任したことになっている。故意に王名を隠したものもあり最後の仇衡王まで25代の王が即位していたと推定している。

⑥ 首露王の年齢

5人の有力者の統率をした国作りは40歳を越えないとできないと考える。皇后とは50歳前の晩婚で、妃を含め10人余の子どもを作っているのだから60歳までは生きていたと考えられる。王在位は20年位であったと推定できる。

- ⑦ 最後の王仇衡は新羅に投降したという事でこの王陵に位牌が置かれてない。彼は欽明天皇として大和朝廷に入り墳墓は欽明陵として大和にある。正統な天照系の王は日本で欽明－敏達－舒明－天智と続いていく。

⑧ 伽耶国が滅亡した後王宮や墳墓の管理がなされず祭祀も行われなくなっていた。新羅王朝に入った仇衡三男の武力（むりき）の子金舒玄（じょげん）の娘が武烈王の皇后となった。文明皇后は「私は始祖の15代に当る、国は滅んだが祠堂は残っている、偉大な始祖の遺産を大切にし祭祀を復活させる」とおっしゃって祭りが再開した。

王宮と陵墓の大きさ



図—1 天照神陵墓

天照神の陵墓(金首露陵)は周囲300歩 高さ2丈(直径22m×高さ6m)。天照妃(許黄玉)陵墓は直径16~18m×高さ5mで両方共円墳である。単位:歩は23cmに相当する。

卑弥呼の墓は円墳で径100余歩と記録されており日本の歩く1歩は1.5mだから150mの墓だと主張する人が多いが、筆者が主張する卑弥呼の墓は23mであり天照神とほぼ同等の大きさである。

首露王が降臨して最初に手掛けたのが周囲1500歩の外城の場所を定めることだった。(中に宮殿や管理棟を作るため) ー日本式に歩く長さの1.5mだと1辺が560mの巨大なものになるが足幅の23cmが単位だったことで考えれば85mの適切な長さに収まる。

天照神について卑弥呼と結びつけて考える人が多いが卑弥呼は三世紀の人、天照はそれよりずっと前の一世紀の人。天照神は記紀に堂々と登場していて日本との関係は深いが卑弥呼は記紀にも登場しない人物。混同して考えるのはおかしい。

欽明朝から大化の改新に至る流れ

大和王朝の6世紀から7世紀にかけては激動の時代であり朝鮮半島も中国の随・唐の誕生による影響や高句麗・百済の衰退、その結果中央から遠く離れた小国新羅が半島を統一する事など大きな動きがあった。

欽明王朝が誕生してから大化の改新が行われる7世紀中ごろに至る大きな事件を取り上げて豪族蘇我・物部氏と天皇家がどのように行動していたのかをまとめる。

欽明朝が大和王朝の黄金期をつくり上げた事と欽明一家が特別な存在であることは薄々

皆さんが気づいていて文献も多数出版されている。

しかしその事は倭国本宗家が和にやってきて中国も倭国が変質したことを理解したためであることを指摘している人は見当たらない。

金官伽耶王「金仇衡」の家族

最後の金仇衡が532年継体天皇の後をついで第29代欽明天皇に即位している。彼には522年に新羅国法興王からもらった花嫁との間に3男1女の子どもがいた。

三国史記によると三人の王子は奴宗・武徳・武力と名付けられていた。三男武力は新羅の王室に入って将軍として功績を上げ角干（1等官）までアップしたが、彼一族を特に有名にしているのは武力の孫「金庾信（キムソウシン）」(595-673)で、武烈王（金春秋）とともに統一新羅を作り上げた朝鮮歴史上の英雄として国民から尊敬されていること。

仇亥-武力-舒玄-庾信と流れ庾信の妹が武烈王の夫人で文武王の母親になっている。（舒玄は大和朝の舒明天皇と名前がつながっている？）

仇衡一家について筆者は半島に遺跡も残っていて、日本に来た事は当初信じられなかった。列島に渡ったのは長男と二人で、幼い子どもと王妃は新羅王室に移ったものと考えていた。ところが日本書紀を熟読すると王は事前に日本に渡って状況を調べた後、王妃と3人の子ども全員連れて日本に渡っていたことが分かり驚いている。

欽明の皇后「石姫」

石姫は宣化天皇の娘であり継体-安閑-宣化の流れからすると欽明の正皇后としてほとんど学者から異論なく認められている。

しかし安閑・宣化天皇は実在しなかったことがほとんど確実に近い事を考えれば継体系列の「石姫」は無かったと解釈できる。

別の「石姫」、金官伽耶の最後の皇后であった人を「石姫」にすり替えれば三人の子どもが蘇る。長男「奴宗」は大和朝では「ヤタノタマカツ大兄皇子」であり、次男「武徳」は「オサタノナクラフトタマシキ尊」で欽明の次の第30代敏達天皇になっている。

末娘は「サカヌイ皇女」と呼ばれ笠縫邑（桜井市）や三輪神社の摂社「天神社」と関連したものと思われるが詳細は不明である。天照神が女性としたら彼女は正に正統派最後の「天照神」だったことになる。

本来欽明天皇陵墓に葬られなければならない皇后「石姫」はその立場を蘇我系の妃堅塩媛に取られたために息子の敏達天皇墓に合葬されている（太子町にある磯長谷唯一の前方後円墳）ことから半島から渡った王妃であったことが証明される。

皇太子であった長男の「奴宗」は欽明13年（552）年29歳で亡くなっている。この後ふとたましき尊が皇太子になったのは16年後の568年であり蘇我稲目の抵抗ですんなりと兄弟継承は果たせなかった模様である。

継体朝は半島とどのような関係だったか

日本書紀や古事記には王が自ら申し出て金官伽耶の領域が新羅に吸収されてしまったことが全く記載されていない。

筆者が指摘しているようにこの時クーデターによって天皇以下主要人物が死亡し、王朝が無くなってしまう程の大混乱を引き起こしたわけで他国のことにかまっているだけの余裕がなかったのだと思われる。

しかし書紀の内容がこのほかにも三国史記など外から読み取れる情報と大きく食い違っている例をあげてみる。

◆百済王が天皇に任那の4県を割譲して欲しいとの申し出に簡単に許可を出した。任那国王の了解なしで物事が進むはずもないし、大和朝の力は及ぶべくもない。(継体 6)

◆伽耶の港タサツ(金海港)を百済に譲るよう申し入れがあり天皇はこれも了解した。これに対して伽耶王は怒り新羅と結んで日本に恨みを持った。(継体 23)

◆伽耶王が新羅王の娘を娶って子を儲けた。この時百人の新羅の衣服を付けたお供を送り込んだ。伽耶王は自分の国の服を着ない女たちを送り返した。これが新羅との戦争のきっかけになり南加羅など主要な地域を失った。(継体 23)

◆失った金官などの地を取り返そうと近江の毛野臣を安羅に派遣し新羅・加羅・百済の要人を集めて協議を進めようとするも、外交官としての能力の無さを暴露し馬鹿にされるのみでついにはノイローゼで病気になって死亡してしまった。(継体 24)

欽明朝・敏達朝を通して新羅に奪われた土地を如何にして取り返すかが最重要テーマになっているがこれらの日本書紀の記述はおかしい。伽耶王は新羅から嫁を娶りお互い合意の上で安羅以北の土地を分譲しているわけでこの理論は成り立たない。

磐井の戦争にアラカイを将軍として送り出す時、継体は「長門より東は自分が治める」が「筑紫より西は君に全てを任す」と発言している。朝鮮半島に対する大和朝の支配・影響力は全く無かったものと思われる。

欽明クーデターの粗筋

全く没交渉だった大和朝廷に金官伽耶国王の金仇衡がやってきた(529)。書紀には任那王コノマタ干岐(またはアリシト)と表記されている人物。

天皇に対して「新羅が決められた境界を無視して領土を侵害され困っている。助けて下さい」と懇願した。継体は任那滞在中の毛野臣に和解するよう指示を出している。

しかし彼がやってきた目的は別だった。通信技術が全く無かったこの当時、極秘事項の相談には王自身がやってこざるを得なかった。この時継体朝を取り仕切っていたのは大伴金村連・物部荒甲(アラカイ)連・巨勢男人大臣の三人が中心人物である。

景行天皇以降大和朝廷を動かしてきた蘇我系の人物が朝廷の運営に参加してない事が不可解である。欽明天皇即位の後王を支える主要豪族が変わった。

巨勢男人大臣は529年死亡、大伴金村も欽明即位時半島のトラブルの責任をとって失脚している。物部氏も荒甲から尾輿(オコシ)に替わっている。

一番大きな変化は蘇我稲目宿禰が大臣として登場し、稲目・馬子二代に渡って圧倒的な力を発揮しだしたことである。具体的な「変」の内容はどこにも書かれていないが蘇我稲

目が中心人物で彼の支配下にあった東漢直系の人間に「欽明の変」を具体的に実行させたものとするのが真実に近い。

天照系の宗家が遠征したが大勢の軍隊を連れてやってきたわけではなく数人の蘇我系ガードマンに守られて金仇衡王一家が秘密裏に来日したものと推定する。

欽明天皇は大量の蘇我系皇子・皇女を生み出した

蘇我稲目の方針で欽明天皇と稲目の娘二人を皇妃として送り込み大量の子どもが生まれた。全部で25人、王位に就いたのが4人であった。

◆皇后石姫の子ども

①ヤタノタマカツ大兄 ー② ヌナクラフトタマシキ尊（敏達帝） ー③ カサヌイ皇女
2男1女

◆第一妃：稲目の長女蘇我キタシ媛から

① 大兄（用明帝） ー② イワクマ皇女 ー③ アトリ ー④ トヨミケカシキヤ媛
（推古帝） ー⑤ マロコ ー⑥ オオヤケ皇女 ー⑦ イソノカミベ ー⑧ ヤマシロ
ー⑨ オオトモ皇女 ー⑩ サクライ ー⑪ カタノ皇女 ー⑫ タチバナモトノワカ
ー⑬ トネリ皇女 7男6女

◆第二妃：妹の蘇我オオアネノキミ媛から

① ウマラキ ー② カズラキ ー③ アナホベ皇女（用明皇后） ー④アナホベ ー⑤ ハ
ツセベ（崇峻帝） 4男1女

欽明天皇即位時の年齢推定32歳、キタシ媛が2年毎に出産するとして26年間生み続けたことになる。間隔が伸びることを考えれば欽明が65歳位まで生ませる努力を続ける大変な精力家だったことになる。

自分の意志だったらの話で、別の見方をすれば、稲目の方針に従って無理やり作ることを強制された立場だったことも考えられる。皇子だけで十三人、女性も含めると二十一人が欽明皇子として次期皇位を狙う競争相手である。

景行天皇や武内宿禰のように征服した各地の王の娘に生ませた皇子はランクができるので大勢抱えても問題は少ないが同じ立場の皇子の乱造は政策とした場合問題があったのではないか・・・乙巳の変（大化の改新）の原因はここにあったと考える。

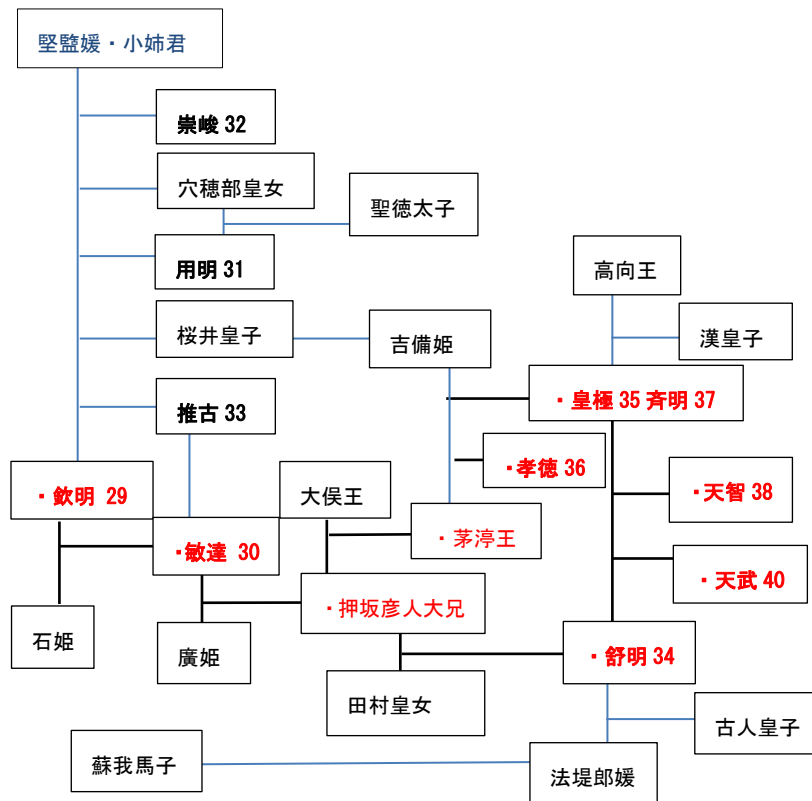
別の見方では皇室がこれだけの人間を抱えてもやっていける豊かな時代になった現れでもある。

皇位はどのように引き継がれたか

欽明の跡を引き継ぐべき皇太子の奴宗は29歳前後で亡くなっている。すんなりと皇位を引き継がせない陰謀があった可能性もある。次男武徳が皇太子に指名されたのは兄の死から16年もたってからである。

馬子は蘇我の血を持たない欽明の子どもの即位を何としてでも避けたいとの思いがあったものと思われるが欽明が長生きし、風格が出てきた直系の敏達に譲らざるをえなかった。

その後の3世代目が問題で、欽明直系の立場からいくと「押坂彦人大兄皇子」にいくな



図一 3 欽明天皇以降の王位継承の図

・印は欽明（天照系）と血筋の濃い人

宗教戦争－蘇我・物部覇権争い

熱心な仏教徒であった百済の聖王から日本に仏教を伝来したのは欽明 13（552）年のこととされる。聖王は「仏教が世界最上の法であること、インドから三韓まであまねく流布していることで日本も導入すべきである」と述べている。

欽明天皇はこれを喜び、蘇我稲目も世界で流行している仏教を積極的に推進すべきと提言した。物部御輿、中臣鎌子などは日本には古来からの神がいるので必要ないと反対した。欽明帝は新羅でもこのような問題が発生したが法興王の時仏教公伝を受け入れた事実（528年）を知っていたがあえて彼の意志表示はせず連・臣の協議にまかせた。この論争は反対派が圧倒的に強い中、次の世代に引き継がれた。

貿易を通して世界情勢に詳しい蘇我馬子による積極的な推進によって世論は受け入れ肯

定派が多数を占める所まで状況が変わってきた。更に高句麗から指導者（僧惠便がやってきた）を呼んだり、寺院を建てたり環境整備に務めた。

蘇我馬子や聖徳太子らが中心になって反対派の物部守屋勢力と武力衝突までして滅ぼしてしまった（崇峻帝の 587 年）。蘇我軍が苦戦している中、もし勝たせて頂いたら堂宇を建立しますと誓った手前、勝利の暁に摂津の国に四天王寺を建立した。

この戦いは仏教の導入だけでなく蘇我一物部の覇権戦争であり、本来ならば伽耶天照系から出ている物部氏が政治の中心になるべき立場だったが蘇我氏が覇権を握り蘇我馬子一推古天皇のラインでほぼ独占的に物事が決められていった。

この宗教戦争では押坂彦人大兄は蘇我方の仏教推進派の立場を通していたが直接表面に出ることは無くこの騒動以降社会から消えてしまっている。反対派の物部一家とトラブルがあったのか、病気だったか不明であるが何人かの重要人物が消えており物部氏の抵抗が強かったことが伺われる。

蘇我馬子と推古天皇

崇峻帝の後の人選では彦人大兄も年齢的には問題が無くなったが有力な競争相手として竹田皇子、厩戸皇子などが現れ決めかねる状況であった。

カシキヤ媛は敏達との息子、竹田皇子を何としてでも王位に就けたかった。しかしこれらから選ぶとなると彦人を対象から外すわけにいかず馬子が選んだのは敏達帝の皇后カシキヤ媛、女性としては初めての推古天皇であった。

この選択は正に天才政治家馬子でなくてはできない決断であり、安定した推古王朝を聖徳太子の宗教面・中国など先進諸国の政治や経済の知識のサポートを受けて長期間継続することができた。

馬子と推古とは一世代離れているように感じるが稲目の欽明妃になった姉たちとは年が離れた末息子だったらしくて馬子 551 年、推古 554 年の生まれでたった三歳年上に過ぎない。カシキヤ媛は 23 歳で敏達皇后になり 39 歳で推古天皇に即位したがまだ 39 歳の若さであった。

628 年崩御しているが 36 年もの間在位していたため彦人大兄、厩戸皇子が登場するチャンスは失われて蘇我系色に塗り替えられた新たな蘇我王朝が再現された。

尚ほほぼ同時期に馬子も無くなっているのも馬子と推古は同一人物だったとの説を称える人もいるが 3 歳の年齢差では時期が重なるのもあり得ることだ。

押坂彦人大兄

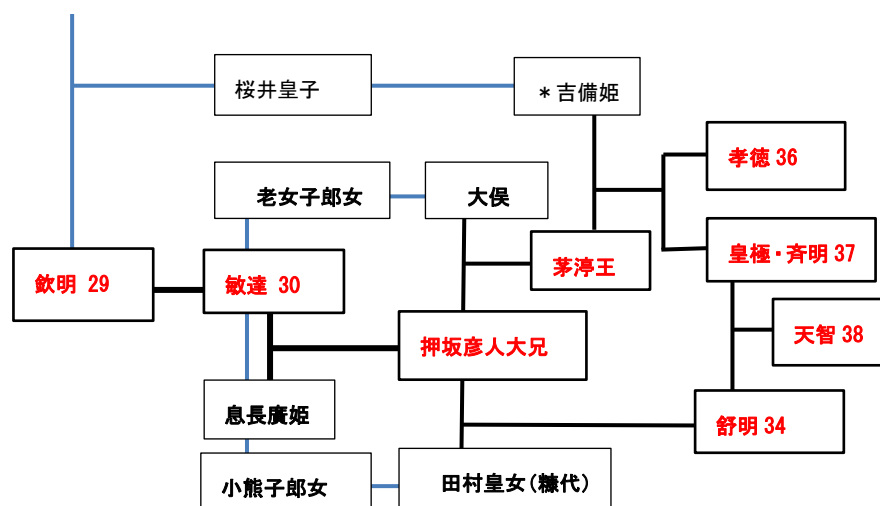
押坂とは彼が育てられた場所の名前で息長氏の管理下の押坂宮があった。允恭皇后の忍坂大中媛はこの出身である。欽明天皇直結の孫で当然即位すべき人物であったが蘇我系の後継者バトルの中で消えてしまった。

しかしその子どもから舒明・斉明・孝徳が生まれ更にその次の天智・天武に繋がっていた重要人物である。敏達天皇の第一皇子として誕生し、母は息長真手王の娘・廣姫であった。敏達帝が 572 年に即位した時には既に 42 歳になっていた。

押坂彦人が生まれたのは575年で敏達王が崩御した時には未だ18歳前後の若さで天皇即位には問題であった。天皇に即位することはできなかったが彼の系統から飛鳥時代を支配する重要な天皇が続出した。

図ー4 押坂彦人大兄を中心にした系統図

欽明王の大和朝における影響力



◆ 舒明天皇の即位：

伊勢の首（オビト）の娘（天皇家とは無関係）と舒明の間に生まれた田村皇女（アラテ媛）と彦人との間に生まれた田村皇子が舒明天皇として即位した。

跡継ぎ候補が山背大兄（聖徳太子の子）と田村皇子の二者で馬子でなく蝦夷の代になってからは独裁できず両派に分かれて争った。

田村皇子は馬子の娘、法堤郎女と結婚し次世代の有力者「古人皇子」を儲けたことで推古帝も亡くなる前、田村を選ぶよう言葉を残していたことが決め手になって蝦夷大臣の決断で舒明帝が実現した。

◆ 茅渟王：

春日の中若子の娘オミナコイラツメと敏達の間でできた大倭王を娶って茅渟王を生んだ。

「茅渟」とは大阪の海を古代では「ちぬ」と呼んでいた。一般には大阪府南部和泉にある地域のことを指す場合が多いが応神天皇が宮を構えた現在の大阪市の中心部、孝徳帝の難波長柄豊碕宮跡の辺も有力地と想定できる。茅渟王の子どもはここで育っていたと推定できる。

◆ 欽明とキタシ媛の10番目の子サクライ皇子の娘「吉備姫」と彦人との間に茅渟王が生まれた。茅渟王は宝皇女と軽皇子の2人の子どもを生んでいる。宝皇女は最初の結婚は高向王とで漢人を生んでいるが数年の後舒明帝が誕生すると同時に高向王と離婚して舒明帝の皇后になっている。宝皇后から2男1女が生まれ ① 葛城の皇子（天智）、② 間人皇女（孝徳皇后）、③ 大海人皇子（天武）である。

◆ 天皇家を引き継ぐ皇子の母親は天皇と何らかの関係ある皇女でなければならないが天

皇につながる彦人大兄、茅渟王、舒明、宝皇女などの母親は天皇と直接の関係の無い人ばかりである。伽耶国（倭国）本宗家の血筋に繋がっている皇子の皇后や妃の候補は誰でも大連・大臣たちを皇女として認めるような威力を持っていたようである。

忍坂部や丸子部といった息長真手王から押坂彦人大兄皇子に譲られた膨大な私領は以後も息子である舒明から孫の中大兄皇子らへと引き継がれて大化の改新後に国家に返納された。

押坂彦人大兄の墓は、大和国広瀬郡にある成相墓（ならい）である。ここの墓域は東西15町、南北20町と巨大で延喜式に記された墓域では最大級の広さをほこる。この墓は広陵町にある牧野古墳が想定されている。

牧野古墳の石室は明日香村の石舞台古墳とほぼ匹敵する大きさである。蘇我氏の全盛期に彦人大兄のためにこのような巨大な墓が造られたのも血筋の大きさを皆が認めている証拠であろう。

大和朝廷に伽耶本宗家の血が入り蘇我系の本格的王朝が形成された。蘇我稲目一馬子の二人が余りにも偉大な人物だったためにそれを引き継ぐ蝦夷一入鹿の二、三代目が平凡なボンボンだったために蘇我本宗家があっけなく瓦解してしまうのが次の展開になる。

自己紹介

倭国の初めから大化の改新の時代までようやく
まとめ「ブログ白馬の少年」に発表しています。